第7章

ジェンダー平等のための女子教育
ラオスにおける実践事例

長島　千野

1　はじめに

プラン・インターナショナル（以下、プラン）は、子どもの権利を推進し、貧困や差別のない社会を実現するために世界70ヵ国以上で活動する国際NGOであり、1937年の設立以来「子どもとともにすすめる地域開発」を実施してきた。開発援助の分野では、1980年代の「ジェンダーと開発」アプローチの誕生、1995年の世界女性会議における「北京宣言・行動綱領」の採択、2000年のミレニアム開発目標（MDGs）の設定等の動きによりジェンダー主流化が推しすすめられてきた。近年、開発途上国において女子教育の普及による経済効果が強調されるようになり、さらに2015年の持続可能な開発目標（SDGs）の設定により、多くの女子教育支援やジェンダー平等実現への取組がされるようになった。プランも女の子の支援活動を開発途上国で行ってきたが、活動のなかから女子教育の普及のみが女の子のエンパワーメントやジェンダー平等実現につながるわけではなく、包括的で変革的な支援が必要であることを学んできた。本稿では、開発途上国でジェンダー平等実現のための女子教育の有効なアプローチを整理し、プランのアプローチの変遷、プランが提唱するジェンダー・トランフォーマティブ教育とラオスにおける実践例を紹介する。

2　開発途上国における女子教育とジェンダー平等

なぜ開発途上国で女子教育支援が必要か

ユネスコのデータによると、過去20年の世界的な女の子の教育アクセスは大きな改善をみせており、アジア地域の中等教育（中等学校と高等学校）においては、学校に通っていない男の子が女の子の数を上回るようになった。しかし、初等、中等教育を合わせて学校に通っていない子どもは２億5,000人以上にも及び、小学校に通っていない女の子は3,230万人、男の子は2,680万人と600万人のジェンダーギャップが存在する（UIS 2019：2）。また、いまだに早すぎる結婚・妊娠、女性性器切除（FGM/C）などのジェンダー規範に基づく暴力[1)]や有害慣習がある地域もある。今も約５人に１人の女子が18歳未満で結婚しており、南アジアやサハラ以南のアフリカにおいては３人に１人に及ぶ。FGM/Cが実施されている国では、15～19歳の女の子のうち、34％が被害にあっている状況である（UNICEF, UN Women, Plan International　2020：20-21）。

女の子が教育を受けることは、基礎的な学習能力、知識やスキルを身につけるためだけではなく、早すぎる結婚・妊娠やジェンダーに基づく暴力の予防にもつながる。中等教育まで受けている女の子は、初等教育のみを修了した女の子と比較して10代に結婚・妊娠をする率が低く、大人になった時の収入はまったく教育を受けたことがない女の子の２倍になる。ただし、中等教育まで修了すればよいわけではなく、生徒の安心・安全が確保された環境で、質の高い、そして批判的思考、問題解決能力、デジタルスキルなど現代の労働市場に必要とされている能力が得られる教育が必要となってきている（UNICEF, UN Women, Plan International　2020：10）。

女子教育とジェンダー平等の関連性

女子教育がすすむと、家族計画が改善され出生率と乳児死亡率低下、子ど

もと家族がより健康的になり、国の経済成長へ貢献するという調査結果があり（Herz, Sperling 2004：3-6)、これらのデータは政策や支援計画で広く用いられるようになった。他方で、このデータを使った政策や支援計画をジェンダーの視点から見た時、女の子・女性を取り巻く構造的な問題や男の子と男性の役割、家族、コミュニティそして社会全体のジェンダー規範が、必ずしも反映されているわけではない。

加えて、就学率、修了率など教育のアクセスにおけるジェンダーギャップが改善しただけでは、ジェンダー問題を解決することはできない。女子教育とジェンダー平等の関連性は何か、ジェンダー平等に真の意味で貢献する女子教育とはどのような支援なのか。ジェンダー平等を実現する女子教育の支援について、プロジェクト評価に関する169の文献調査を通して調べた報告書によると、以下の点が指摘された（Unterhalter , North , Arnot, Lloyd, Moletsane, Murphy-Graham, Parkes, Saito 2014：1-3)。

（１）インフラとリソース

女子教育の改善とジェンダー平等に効果的な方法として、貧困世帯、脆弱性の高い女の子のみをターゲットに現金支給、就職に関する情報などのリソース提供を行うというものがある。一方で、生理用品の支援が女の子の学校出席に直接的な影響を及ぼすという根拠は限定的である。インフラは、保健サービスの支援と一緒に行われると、女の子、男の子両方の就学と成績の改善につながる。総合的にみて、インフラとリソースの支援は、学校における女の子のエンパワーメントやジェンダー平等よりも、女の子の就学、出席、成績の改善との関連性が高いとされる。

（２）制度、教育システム

学校、教室における教師の教授法、生徒の学び、カリキュラム、教材にジェンダー平等の視点を統合し、現地の文脈に合った内容とすることが効果的である。教育分野での教育システムや制度への効果的な介入は、ジェンダー平等にポジティブな影響を及ぼすとされる。

（３）ジェンダー規範の変革と包摂（インクルージョン）の促進

ガールズクラブ、宗教コミュニティや男の子・男性のエンゲージメントなどは、ジェンダー規範を変え、包摂を実現する効果的な介入とされる。ただしこのアプローチのインパクトについては、十分な調査が行われていない。

（4）女子教育の普及、ジェンダー平等、社会変革のリンク

女子教育の普及と同時に、社会全体でジェンダー平等に関する理解の促進やジェンダー平等のための制度の導入などを進めることが、効果的と考えられている。しかしこの点においても調査は十分ではないために、根拠が明確とはされていない。

（5）持続発展性

女性教育とジェンダー平等のプログラムを継続的に実施する方法。しかし、この方法に関して持続発展性に関する調査は不十分である。

3　プラン・インターナショナルの女の子支援の変化

キャンペーンから、社会変革のための活動の柱へ

プランは子どもの支援団体として、長い間、子どもの権利条約に基づいて、「子どもとともにすすめる地域開発」を実施してきた。活動のなかで、「女の子だから」という理由で、男の子より女の子の方がより差別や不利益を受けている状況を目の当たりにするようになり、2007年より女の子が置かれている状況を調査し「世界ガールズ・レポート」の発行及び「Because I am a Girl」というグローバルキャンペーンを開始した。この頃に、プランのカナダ事務所が、このキャンペーンを通して女の子の権利とジェンダー平等実現について国際的な意識を高める目的で国際ガールズ・デーの制定をするようカナダ政府に働きかけた結果、2011年に国際デーとして国連に採択され、2012年10月11日から正式に国際ガールズ・デーが施行された。

それ以降プランは、毎年国際ガールズ・デーに合わせて女の子の権利とジェンダー平等実現に関するさまざまなテーマで調査を行い、イベントや政策提言を通じて、メッセージを発信している。「Because I am a Girl」はキャン

ペーンとして始まり、主に開発途上国の女の子の教育支援に主軸を置いてきたが、時間の経過と共にキャンペーンから、社会を真に変革するための大切な活動の柱として、プログラムやアドボカシー（政策提言活動）をはじめ、すべての活動に内包されるようになった。「Because I am a Girl」のもとで、早すぎる結婚と妊娠、FCM/C、ジェンダーに基づく暴力、性と生殖に関する健康と権利、教育など、女の子と若い女性が不均衡な影響を受けているさまざまな課題に取り組んできた。

ジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ

開発途上国における現場での活動を通し、女の子個人のエンパワーメント促進だけでは不十分であり、女の子の権利とジェンダー平等達成を促進させるためにも、より変革的なアプローチが必要であるという認識がプラン内で高まっていった。プランは、ジェンダー主流化を推しすすめると共に、新たに「ジェンダー・トランスフォーマティブ（変革的）・アプローチ」を導入し、プログラムとアドボカシーの活動に以下の要素を入れることを目標として設定している。

・ジェンダー不平等とその根本原因となるジェンダー規範、ジェンダー間の不均等な力関係、差別的な法律や制度を変え、女の子と女性の状況改善だけでなく、社会的地位を向上させる。
・女の子と女性が声をあげ、意思・自己決定ができるように支援する。
・同じ「女の子・女性」というグループでも、障がいの有無、民族、人種、セクシュアリティ、年齢などにより個々の経験が異なるため、ジェンダー以外のアイデンティティが原因で受ける排除の課題解決にも取り組む。
・ジェンダー問題は女の子と女性だけのものではなく、男の子と男性との関わりのなかで生じる問題であるため、ジェンダー平等達成を目的とした男の子と男性のエンゲージメントを行う。男の子と男性が社会的に学び、身につける「男らしさ」で特に有害な男性性（マスキュリニティ）をよりジェンダー平等で非暴力な意識・行動に変えていく。

プランのジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチは、女の子や女性が本来持っている力を発揮し、権利実現に障壁となっているものを取り除くだけでなく、男の子と男性がジェンダー平等を受け入れ、男女ともに権利を行使し、変化の担い手になることを目指している。これらの変化を導くために、１）社会規範・態度・行動の変容、２）社会的・経済的資源とセーフティーネットの提供、３）法律・政策・予算の確保、の３点が必要であると考える。

特に、ジェンダー規範をジェンダー不平等の根本原因として捉え、ジェンダー規範を変えることが、プランのジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチの中核となっている。ジェンダー規範により、固定化された性別役割分業や事実に基づかないジェンダーの思い込み（ステレオタイプ）が形成され、ジェンダー不平等やジェンダーに基づく暴力の被害が永続されているためである。また、従来の「女性」と「男性」という二分化されたジェンダーの考えは、多様な性のあり方を正確に反映しておらず、男女だけなく、女性でも男性でもない、もしくは両方を持ち合わせているノンバイナリージェンダーの人々の排除につながるため、この点に留意し、プランのジェンダーの定義もより包摂的になるように近年改定されている[2)]。

プランでは、ジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチを取り入れていくために、以下の４つのレベルを基に、プロジェクトを評価し、異なるプロジェクトの目的、分野や規模、実施する地域の状況や文化などの文脈のなかで、可能性を最大限に引き出し、すべての活動がジェンダー・トランスフォーマティブであることを目指している。

表１　ジェンダー平等と包摂を目指す４つのレベル

レベル		説明
レベル１	ジェンダー・アンアウェア（Gender Unaware）	ジェンダー平等と排除の問題をまったく認識しておらず、ジェンダー不平等や排除の状況を悪化させる傾向がある。ジェンダー平等と包摂に貢献する可能性はない。
レベル２	ジェンダー・ニュートラル（Gender Neutral）	ジェンダー平等と排除問題を認識しながらも問題解決のためにとくに何もしないため、ジェンダーの不平等と排除を結果的に助長する傾向がある。ジェンダー平等と包摂に貢献する可能性はないか、あってもごくわずかである。
レベル３	ジェンダー・アウェア（Gender Aware）	実際のジェンダー平等と排除の問題を提示することによって、多様な女の子・女性がおかれた状況の改善に努めているが、不平等なジェンダーや排除の要因になっている力関係を変えようという意図はない。ジェンダー平等と包摂に貢献する可能性は中レベルである。
レベル４	ジェンダー・トランスフォーマティブ（Gender Transformative）	不平等なジェンダーや排除の要因になっている力関係を変えようとする明白な意図がある。プログラムは、単に多様な女の子・女性の現状を改善するだけでなく、彼女たちの社会的地位を改善し、彼女たちが権利を十分行使できるように目指すことに焦点を置いている。ジェンダー平等と包摂に貢献する高い可能性がある。

女子教育からジェンダー・トランスフォーマティブ教育へ

プランではジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチの導入により、女の子の教育支援も変化してきた。女の子の教育アクセスを改善するだけでは必ずしもジェンダー平等を達成できるわけではなく、包括的で変革的な支援が必要であるためである。このアプローチを用い、女の子の教育環境を改善するだけではなく、その地域に根付いたジェンダーに基づく力関係の是正やジェンダー規範を見直し、少数民族、障がいなど、社会的少数者の包摂につながる教育方法を目指すものである。具体的には、教育へのアクセスと学校での教育環境、カリキュラム、教授法、学校運営をよりジェンダー平等で包摂的に改善し、教育を受ける子どもと若者が変化の担い手となっていくことを支援する。たとえば、性と生殖だけではなく人との関係性、ジェン

ダーの理解、ジェンダーに基づく暴力、セクシュアリティなどの内容が含まれた包括的性教育をカリキュラムとして取り入れることを推しすすめ、教育環境においては、教師が子どもの多様性を支援し、インフラ面でも障がいがある子どもが学べるように整備し、生理の衛生管理などに配慮したトイレの設置など異なるニーズに対応することを求めている。

また、ジェンダー規範は子どもの早い段階から刷り込まれるため、就学前教育からジェンダーを統合する必要がある。実践例として、就学前教育支援プロジェクトでは、幼稚園の教師にジェンダートレーニングを行い、遊び方やおもちゃをジェンダーにより分けないようにしたり、男性が積極的に育児をできるように、コミュニティで幼児の遊び・学びの場で、男性が父親・養育者として関われる活動を支援することなどがあげられる。

4　ラオス学校でのジェンダー平等促進プロジェクト

プランはさまざまな国でジェンダー・トランスフォーマティブ教育プロジェクトを行っているが、本節では実践例として、筆者がプロジェクト・マネジャーとして現地に駐在し管理を行ったラオスのボケオ県パウドン郡での学校でジェンダー平等を促進するプロジェクトについて紹介する。

図1　プロジェクト実施地域の地図

プロジェクトの背景と活動

ラオスは、東南アジア諸国のなかでも10代の出産と18歳未満の婚姻率がもっとも高く、約35％の女の子が18歳未満で結婚している（Unicef, UNFPA 2018:1-3）。2015年のデータによると、

初等教育（５年）への総就学率[3)]は全国平均で100％に近いものの、前期中等教育（４年）では、全国平均54％、プロジェクトの対象地であるボケオ県パウドン郡は43％、後期中等教育（３年）では全国平均36％、ボケオ県パウドン郡では15％のみである。ボケオ県パウドン郡の就学率を男女比で見ると、初等教育で男の子に対して女の子が－３％、前期中等教育は－５％、後期中等教育は－24％（World Bank 2016:101）と年齢が上がるにつれて、女の子の教育へのアクセスが困難となる。

また、近年都市部と農村部、民族間の格差が広がっている。ボケオ県パウドン郡は、人口の多くが少数民族で貧困率も比較的高いラオス北部の山岳地域であり、伝統的なジェンダー規範も根強く残っている。中等学校は、学校の数自体と教室、学生寮、トイレ、給水設備などの基礎インフラも不足している地域である。

プランはこれらの課題に対応すべく、日本の外務省の助成と日本の支援者の寄付により、2016年から2019年の３年間にわたりボケオ県パウドン郡の中等学校11校の約5,200人の生徒、教師、PTAを対象に「学校でのジェンダー平等促進プロジェクト」を実施した。ジェンダー平等で安全な学校環境づくりをするために、教師、保護者代表へのジェンダートレーニング、子どもクラブを結成し、リーダーによるピア（他の生徒）や保護者への啓発活動、ジェンダーに基づく暴力相談・通報窓口設置のためのトレーニング、学生寮の建設と施設の維持管理トレーニングを行った。

生徒と教師に起きた変化

プロジェクト終了時評価では、開始時に行ったベースライン調査のデータと比較して、学校施設の維持管理に改善が見られた他、生徒の87％、教師の100％が事業開始後に学校でジェンダー平等に関する何らかの変化が起きたと回答した。意識・態度に関しては、生徒、教師ともにジェンダーステレオタイプや性別役割・分業（たとえば「男性は女性より家事や子育てに向いていない」など）の考えについてはまだ根強く残っているものの、95％以上の

生徒、教師が性別に関係なく教育やリーダーシップの機会が与えられるべきであるとの考えを示した。

また、本プロジェクトでは、ジェンダーのような複雑な課題における意識、行動の変化を質的に捉える方法として、モスト・シグニフィカント・チェンジ（Most Significant Change：以下、MSC）手法を用いてモニタリングを行い、受益者からMSCストーリーを集めた。そのなかでも特に顕著であった変化として女の子のリーダーシップとジェンダーに基づく暴力への意識があげられる。生徒と教師があげた「ジェンダー平等に関してもっとも重要な変化（MSC）」についての声とともに紹介する。

女の子のリーダーシップ

「私の学校で起きたもっとも大きな変化は、女子の学級委員長が増えたことです。私も去年から初めて学級委員長に選ばれて、子どもクラブリーダーも務めるようになりました。以前は恥ずかしがり屋で、人前で話すことが苦手でした。プランのトレーニングに参加して、子どもクラブの活動をしているうちに、自分に自信がついてきました。今ではイベントの司会をしたり、寸劇で役を演じたり、意見を言えるようになりました。周りの人も私が言うことを聞き入れてくれていると感じます。」

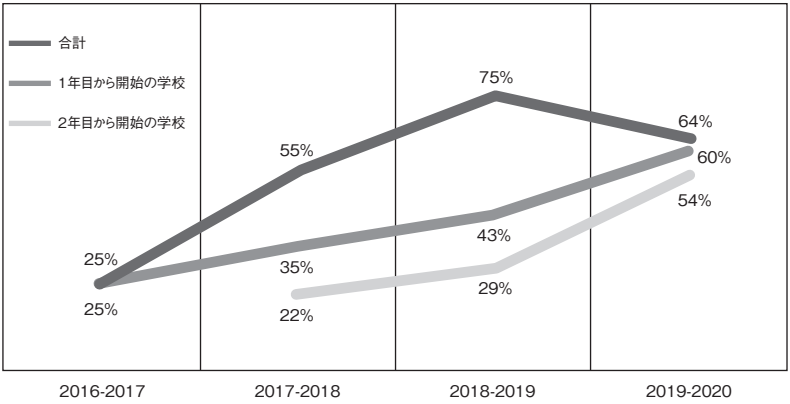
MSCストーリーより（子どもクラブリーダー、当時高校３年生の女の子）

プロジェクト開始時の生徒へのインタビューから、学級委員長が投票により女の子が選ばれても、教師に「女の子だから無理」と言われ辞退をさせられる女子生徒がいることが分かった。子どもの時から学校で、リーダーで意思決定する人は男性・男の子というジェンダー規範・役割を決めつけられて、女の子が教育を受けることでジェンダー平等に貢献するとは言い難い状況であった。

教師へのジェンダートレーニングでは、学校でのジェンダー平等度チェックリストに学級委員長の男女比を入れていた。トレーニングで生徒のリー

ダーシップにジェンダーギャップがあることに気づいた教師たちが、アクションプランのなかに女子生徒の学級委員を増やすという目標を掲げ、行動に移した。その結果、対象校ではプロジェクト開始前の学級委員長の女の子の比率が20％台であったのに対し、終了時には60％台まで上がった。

図２　プロジェクト対象校の女子学級委員長の比率推移



「少数民族の女の子は、特に恥ずかしがり屋で自信がない子が多いです。授業で積極的に発言したり、意見を言うのは、ほとんどが男子生徒。プランのプロジェクトでトレーニングに参加し、ジェンダー平等、差別や暴力について学び、子どもクラブの活動も始めました。私たちの学校では、特に女子生徒が学級委員長になったり、授業や集会で自分の意見を言えるようにサポートしていて、以前と比べて女子生徒に自信がついて、積極的になったと思います。女子生徒の学級委員長も増えて、今では４割の学級委員長が女の子ですし、子どもクラブのリーダーとしても女子生徒が活躍しています。この変化について、プロジェクトを担当している教師としてとても誇りに思いますし、今後も私たちの学校では女子生徒の能力開発を支援していきます。」

MSCストーリーより（女性、プロジェクト担当教師）

「１年間子どもクラブの活動をしてきて、自分が変わったことに気が付きました。以前はジェンダー平等について何も知らなかったので、女の子の権利とか差別については考えたことはなく、僕たち男子生徒は女子生徒をからかったりしていました。今は知識がつき、寸劇などの活動を実施する経験を積むことができました。男子生徒の仲間にもジェンダー平等、女の子の権利について情報を提供して、啓発を行っています。時々言うことを聞かない男子生徒を鎮めたりして、学級委員長の女子生徒をサポートしています。学校には女の子のリーダーが増えて、色々な活動をしています。小さな変化ですが、ジェンダー平等に向けて少しずつ歩んでいますし、この変化がそのうちコミュニティでも起きて欲しいと思います。」

MSCストーリーより（子どもクラブのリーダー、当時高校３年生の男の子）

これらの声より、教師と男子生徒の理解も深まり、女の子がリーダーになることを阻害せずに、サポートするという環境が、以前より整ったとことがうかがえる。プランでは、リーダーシップとは役職だけではなく、女の子が自信や勇気を持つことができること、そして発言、行動、意思決定ができたり、周囲によい影響を与えることができる力もリーダーシップの要素と考える。女の子が自分に関わる事柄について意思決定ができるという自信がついたことも、プロジェクトの開始前と終了時のデータ比較からも見て取れる。

ジェンダーに基づく暴力への意識

「私たちの学校では、休憩時間に男子生徒が女子生徒のスカートめくりをしたり、胸やお尻を触る光景が見られました。女子生徒は屈辱を感じ、不快な思いをして、男子生徒の周りでは安全ではないと思っていましたが、報告することも怖くてできませんでした。プロジェクトの活動が始まって、女子生徒から、男子生徒の態度が変わったと聞きました。男子生徒は以前に比べ、性的嫌がらせ、とりわけ心理的な性的嫌がらせと女の子の日常への影響について理解し、意識が変わったようです。プロジェクトの活動を

担当している教師としてはこのような変化が起こり、大変嬉しく、誇りに思っています。」

MSCストーリーより（男性、プロジェクト担当教師）

子どもクラブの活動を通して、自分に自信がついたことが一番の変化です。あとは学校で、男子と女子の接し方が変わりました。以前はよく男子が女子に向かって『尻が大きい』と言ったり、胸やお尻についてからかったりして、女子を怒らせていました。これまでは普通のことだと思っていましたが、それは性的嫌がらせだし、校則違反であることを知り、やめました。今は女の子や女性の権利を学び、女の子は教育を受ける権利があることを理解しています。

MSCストーリーより（子どもクラブリーダー、当時高校３年生の男の子）

対象校では、教師トレーニングでの話し合いから、女子生徒の胸を触る男子生徒がいること、酔って女子寮に入って来て女子生徒の身体を触った教師がいるなどの実情が分かってきた。トレーニングではジェンダーに基づく暴力に関する論点を入れ、子どもクラブリーダーが行う啓発活動では生徒たちがジェンダーに基づく暴力の原因や影響について考えることができるように啓発ツールを作成した。

プロジェクト開始時のベースライン調査では、男子生徒の暴力へ対する意識（暴力行為を暴力と認識する意識）が女子生徒に比べて低かったが、終了時評価の調査では男子生徒の意識が女子生徒と同等レベルまで向上した（以下表２参照）。しかし、プロジェクトを通じて全体的に暴力行為への認識は向上がみられたものの、依然として女子生徒に対しての暴力行為よりも、男子生徒に対しての暴力行為の方が許容・軽視される傾向にあり、その背景にまだ「男の子は強く、女の子は弱い」というジェンダーステレオタイプがあることが懸念される。また、社会的に期待されるジェンダー表現とは異なる表現をする生徒へのいじめに対しての意識も変化がみられなかった。

以下の暴力ケース（例）について１.暴力ではない～５.非常に暴力的であるのスコア付けを生徒にしてもらい、結果の平均値を出したもの。５に近い方が暴力行為であるという認識が高い。

表２　プロジェクト対象校の生徒の暴力に対する認識

	開始時			終了時			
平均スコア（1-5 ）	男 96 人	女 100 人	男女 合計	男 106 人	女 94 人	男女 合計	スコア の変動
男子生徒が女子生徒を叩く	4.6	4.6	4.6	4.2	4.1	4.2	－ 0.4
女子生徒が男子生徒を叩く	3.5	3.1	3.3	3.2	2.7	3.0	－ 0.3
男子生徒が女子生徒の体を同意なしに触る	2.4	3.3	2.8	4.0	4.4	4.2	1.4
女子生徒が男子生徒の体を同意なしに触る	2	2.8	2.4	3.1	3.8	3.5	1.1
女子生徒がトイレを使っている時に男子生徒が覗き見をする	2.3	3.9	3.1	4.2	4.6	4.4	1.3
男子生徒がトイレを使っている時に女子生徒が覗き見をする	2.1	3.4	2.8	3.7	4.1	3.8	1.0
男子生徒が女子生徒へ性的な写真を見せる	2.3	3.3	2.8	3.4	4.0	3.7	0.9
女子生徒が男子生徒へ性的な写真を見せる	2.2	3.2	2.7	3.2	3.7	3.4	0.7
女の子のように見える/振る舞いをする男の子をいじめる、または男の子のように見える/振る舞いをする女の子をいじめる	3.05	3.7	3.4	3.2	3.7	3.4	0.0
平均スコア	2.59	3.3	2.9	3.5	3.8	3.6	0.7

プロジェクトでは、学校で暴力が起きた時の通報・相談の手順についてのポスターを貼り、匿名で報告できるポストを設置したが、その効果として、暴力が起きた時の通報・相談に関する意識については大きく向上した。「生徒が暴力の被害に遭った時に先生に相談できる」と回答した生徒が事業開始時と終了時では32％から94％へ、教師は19％から100％へ増加している。

学びと残る課題

生徒と教師の間で多くのポジティブな変化が起きたことが確認できたが、意識・態度に関しては、生徒、教師ともにジェンダーステレオタイプや性別役割・分業の考えなどがいまだに根強く残っており、持続的な行動変容を起こすには長い時間がかかる。一番望ましいことは、ジェンダー教育がカリキュラムに入っていることだが、ラオスの教育省は、ジェンダー平等や包摂についてはさまざまな教科のなかに統合をするという方針であり、教師の能力を維持していくためには校長や郡教育局のコミットメントが重要となってくる。

また、障がいのある生徒やLGBTIQ+[4)]の生徒への包摂の意識の改善もほとんど見られなかった。これは啓発の内容に包摂の内容は少し入っていたものの、プロジェクト全体では積極的な取組がなされなかったことが原因であると考えられる。さらに、保護者への働きかけ、コミュニティでの活動を強化する工夫や、貧困などのジェンダー以外の要因で中途退学する生徒や学校に通えない子どもたちも依然おり、貧困地域においては貧困家庭の生計支援などもプログラムに組み入れる包括的な支援が求められる。最後に、プロジェクトの終了時だけでなく、プロジェクトの介入が10代の子どもたちに与えるインパクトを長期的にトラッキング（追跡調査）していく仕組みも今後必要である。

４　おわりに

本稿では、開発途上国でジェンダー平等実現のための女子教育支援について、プランの活動を紹介することを通して、アプローチ方法について整理した。女子教育支援が女の子のエンパワーメントやジェンダー平等実現に貢献するためには、教育へのアクセスや教育の質改善だけでなく、学校での教育環境、カリキュラム、教授法、学校運営、学校におけるジェンダー規範や固定観念の強化を無くす取組が肝要である。女の子の人的資本を超え、社会規

範や社会構造を変えていくジェンダー・トランフォーマティブ・アプローチは、学校だけでなく、コミュニティと社会全体で行っていかなければならない。

ジェンダー・トランフォーマティブ教育の実践には、１つのプロジェクトでできることが限られているため、プログラムとして包括的に学校とコミュニティをカバーしていき、社会規範を変えるためにも長期的な支援が求められる。また、女子教育とジェンダー平等の分野は、効果に関する調査データが不足しており、女の子だけでなく男の子も含めた長期的なインパクトや、社会変革について検証していくことが今後必要である。

注

1）プランは、「ジェンダーに基づく暴力」を女性だから、男性だから、セクシュルマイノリティだからというジェンダーが原因で受けるあらゆる形態の暴力と定義し、ジェンダー間の社会的な力の不均等やジェンダー規範が原因としている。

2）以前はジェンダーを「女性、男性といった性別分類の社会における役割、関係、価値についての考え、規範や期待を表し、社会的に構築され、まわりや社会から学ぶ」と定義していた。

3）年齢にかかわらず、ある教育段階における生徒数を、その教育段階に該当する公式の就学年齢人口で割ったもの。

4）レスビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、バイセクシュアル（Bisexual）、トランスジェンダー (Transgender)、インターセックス（Intersex）、自らの性的指向や性自認について疑問を持っている人（Questioning）、またこれらに当てはまらないアイデンティティの人（+）のことを指す。

引用・参考文献・ウェブサイト

Herz, B., Sperling, G, 2004. *What Works in Girls' Education: Evidence and Policies from the Developing World,* Council on Foreign Relations

UNESCO Institute for Statistics（UIS）, 2019. “Fact Sheet no. 56 September

2019” http://uis.unesco.org/sites/default/files/documents/new-methodology-shows-258-million-children-adolescents-and-youth-are-out-school.pdf（2020年8月14日アクセス）

Unterhalter E, North A, Arnot M, Lloyd C, Moletsane L, Murphy-Graham E, Parkes J, Saito M., 2014 *Interventions to enhance girls' education and gender equality. Education Rigorous Literature Review,* Department for International Development

United Nations Children's Fund（Unicef), United Nations Population Fund（UNFPA), 2018 “Report on the Regional Forum on Adolescent Pregnancy, Child Marriage and Early Union in South-East Asia and Mongolia”

https://www.unicef.org/eap/media/3696/file/Adolescent%20pregnancy.pdf（2020年8月14日アクセス）

United Nations Children's Fund（Unicef), UN Women and Plan International, 2020 *A New Era for Girls: Taking Stock of 25 Years of Progress,* New York

World Bank, 2016 “Where are the Poor? Lao PDR 2015 Census-Based Poverty Map: Province and District Level Results”

http://www.decide.la/en/downloads/index/PMR2016-Final-Web.pdf（2020年8月14日アクセス）

World Economic Forum, 2019. “Global Gender Gap Report 2020” http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2020.pdf（2020年8月14日アクセス）

（ながしま・ちや　公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンアドボカシーオフィサー）